

重度の障害のある子どもと共に育ち合う保育

—保育内容の領域「人間関係」に着目して—

The Study on the Childcare that Grows Up with Children Having a Severe Disorder: Focusing on the "Human Relations" of Childcare Contents

下里 里枝*

Satoe SHIMOZATO

抄 録

乳幼児期の子ども達が人と関わる力は、保育所や幼稚園の集団生活で自然と身につくことではなく、そこには保育者の援助や配慮が求められる。子どもは保育者の言動をよく見ている。真似をすることもある。保育者は人的環境の一部である。環境を通して学ぶ乳幼児期は、保育者の子どもへの対応や、保育者同士のかかわり、保護者対応から、子どもたちは様々なことを学んでいる。保育者が子ども達に与える影響は大きい。

本稿は筆者が勤務していた保育所での2年間の実践記録である。筆者にとって重度の障害がある子どもを受け入れ保育したのは始めてだった。試行錯誤しながらの実践であった。重度の障害のある子どもと健常児が関わる中で、障害の有無に関わらず、かけがえのない存在として一人一人にかかわり、共に育つために両者をむすびつける保育のあり方を探っていった。子どもから保育者自身の子ども観・保育観を問われるような質問や行動の場面が多々あった。

保育者の役割として、重度の障害を持つ子どもと共に育ち合う保育のあり方に視点をあて、特に保育内容の領域「人間関係」に着目して保育することが重要であることが明らかになった。

I はじめに

A 児の受け入れについては、事前にH園より相談があった。A 児の母親が両親の介護が必要となり、H園は母子通園なのでA 児を連れての通園が困難となった。A 児だけを預かってくれる保育所に入所させたいとのこと。A 児は情緒は安定しており理解力は3歳位あるとのことだったが、面接するとA 児は言葉がなく、1人では何もできず全面介助が必要であった。

A 児の姿

・生育暦・・・在胎24週 592gで出生。男児

双子であったが、他児は死亡。

・障害の様子・・・脳性小児麻痺（両上下肢の著しい機能障害、自分で体を支えることはできない）

・移動は車椅子・身体障害者手帳（1級）・療育手帳（判定A）・特別児童扶養手当有り

今までこのような重度の子どもを受け入れたことがなく、「療育」ではない「保育」の場での集団保育は不可能のように思えた。A 児の保育のねらいは何なのか。何ができるのか。障害に対する専門的な知識もなく、危険なことはないのかなどの不安がいっぱいだった。保育者や調理師等、職員全員で話し合い、本児を受け入れたらど

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

のようになるのか、子どもの反応はどうかなど、困ったことが起きたらどうするのか等、具体的に受け入れた時の問題を整理して解決方法を考えた。

本児が今まで通園していたH園にも協力をしてもらうことを約束し、最初はスタッフの派遣をしてもらった。作業療法士、理学療法士、言語療法士、保育士など様々なスタッフが交代できてくれた。本児用の介護備品は、実際に本児が保育所で生活をしているのを見てもらい、わざわざ保育所用に作ってもらった。母親の切羽詰った状況を考えると断りきれないこともあり、受け入れることにした。こうしてA児の保育がスタートした受け入れたからには、決してお客さんのような扱いでなく、クラスの一員として保育し、A児にとっても、他の子どもにとっても楽しい園生活をおくり、共に育ち合う保育をするために、職員みんなが責任を持つことを大切に保育していった。

II 受け入れる保育環境について

A児は4歳児であるが、移動のことを考え、1学期は1階の3歳児クラスでA児担当の保育者と2人で保育した。写真の①②③はH園に作ってもらった。戸外遊び用の移動車や砂場用いす①（座位が安定しないので）、食事や室内遊び用のテーブル付きの椅子②、これは、絶えずバギーのストッパーの確認をし、他児が押して危険がないようにした。給食は何でも食べるが一人では無理なので、保育者が介助した。食事用滑り止めマットを用意した。麺類はヌードルカッターで切り、ストロー付きのコップを使用し、吸うことはできないので、汁物はスプーンで食べさせた。昼寝は、他児に踏まれたら本児は一人で移動ができないので安全のために、午睡用のベッド③を作ってもらった。排泄（おむつ交換）はA児用の交換台を保育者が作った。体温調節困難なため、保育室にはクーラーを設置した。



①A児の戸外遊び用の椅子



②テーブル付き車椅子



③お昼寝用のベット

III 仲間づくりと保育者のかかわり

無藤（2018）は、「人は社会の中で生きることの根底にあるのが人間関係であり、そういった意味で領域「人間関係」は基本的に重要である。子どもは生まれつき、人に特別な関心を抱き、特定の人との間に信頼関係を築きやすいようなメカニズムをもって生まれてくる。」⁽¹⁾と述べている。

子ども達はA児に関心を持ち、様々な疑問を保育者に投げかけてきた。子ども達の疑問が本児理解につながる応答をしたいが、納得する言葉がみつからずあいまいに答えることもあった。

1 子ども達の疑問

子ども「なんでおむつしとん」

保育者「A君歩いてお便所いかれへんからね」

子ども「抱っこして行ったらええやん」

保育者「そうかもね・・・」

自分とA児を比べ、便所にいけずおむつをしているA児が不思議だったのだろう。

子ども「あしたになったらあるけるん？しゃべれるん？歩けるようになったら遊ぼな」

保育者「今練習しているの。歩いたりお話したりできるといいね・・・。歩けなくても一緒に遊んでね」

3歳児に障害を理解させるのは難しい。しかし、子どもの疑問にはわかるようにていねいに答えていくことで、何度も同じ質問はしなかった。一生歩けないA児。このことを子どもたちにどのように理解させればいいのか。障害児保育は、保育者の言葉を子ども達は様々な受け取り方をするので、保育者の言葉かけは保育者の保育観そのものであり、とても重みがあり重要であることを意識しておくべきである。

2 A児とのスキンシップでつながるきっかけを作る

気分の荒れていたB児に「A君がベッドから落ちないように見ている」と依頼すると、B児はA児のそばでみていた。するとA児がB児の足を触り始めた。「先生A君が足こそばす」と笑いながら言い、B児もA児の足をこそばし始めた。A児と共感を得るのはこんな場面からかもしれない。しばらく、2人は穏やかに過ごした。A児は、うれしい時や悲しい時は表情で訴える。にこやかな表情は子どもだけでなく保育者もほっとすることがあり、子ども達はA児の笑顔を見たいために、A児を笑わせようと「いないいないばあっ！」をしたり、体を触ったりして関わっていた。

私は言葉でのコミュニケーションができなくても、同じ場を共有することでこのように交流できるんだ。コミュニケーションとは言葉のやり取りだけではないことをB児から学んだ。

3 「自分とは違う」と思う子どもの思いを受け止める

2学期は4・5歳児にもっと関わって欲しいと考えクラスを移行した。保育室は2階なので、移動は保育者がおんぶして行った。2階にも常に車いすを置けるように用意してもらった。子ども達には、事前にA児の病気のこと、歩行や会話ができるようになるために、訓練していること。自分で歩けないから車椅子で生活していること、その他の器具についての説明をしておいた。保育者がすることに興味津々で、すぐにお手伝いの内容を覚えてた。A児の登所を待ちかね、姿が見えたら迎えに行き、持ち物の始末や室内用の車椅子や靴の用意をしてくれた。子どもは自分のことは後になってもA児のお手伝いをしたがる傾向があった。「お手伝い」という場面から関わりを作っていた。子ども達はA児の世話をしたい気持ちにあふれていた。

しかし、A児の障害を伝える難しさも感じた。年齢が大きくなると質問内容も難しくなる。

C男「A君病気なんか？」

保育者「そうよ」

C男「なおるん？」

保育者「治らない病気よ」

C男「なおらへんかったら死んでしまうんか？」

保育者「そんなことないよ」



A児に絵本を読んでくれている

C男が3日目に、母親に「A君歩く練習しようか？」と聞いたようだ。

母親「しようよ」

C男「走れるようになったら競争しような。だって悪いとこ足だけやもんな」

母親は口ごもってしまったようだ。

年齢が大きいだけに大人が絶句してしまいそうな疑問を投げかけてくる。いい加減に聞き逃さずていねいに対応していかねばと思った。C男はその後何かとA児を気にかけてくれ、散歩の時は、車椅子を押し、病気の時は一番に心配してくれた。関係が持てるというのはまず相手への興味・関心から始まるのかもしれない。保育者はその場面を見逃さず子ども同士をつなぐ保育をすることが大切である。

4 「A君くさいで、パンダ組におったほうがええ」事件

毎日昼寝の前に大便のオムツ交換をするA児。D児が突然そばに来て「くさい! A君はパンダ組におった方がええ」と騒ぐ。次の日も同じことを言う。それをみていたC児が「A君は自分で便所いけへんのやで。そんなこといわんとって」と怒って言う。子ども達と話し合いを持つと、他の子ども達はA児の障害について理解していて、自分で歩いて便所にいけない。換えてあげないと気持ちが悪い。「かわいそう」と言う。D児を責める発言が多かった。しかし、D児は譲らず「でもやっぱりくさいから、ぼくのそばにこんとって」といった。



D児は今まではA児に絵本を読んであげたり、車椅子を率先して押してくれたりしていただけにびっくりした。でも、オムツ交換の場所が保育室しかない。衝立をしてオムツ交換をしていたが、大便の場合は臭いと思うことは仕方がないかもしれないとも思った。今まで我慢できたことが急にできなくなったのかもしれない。話し合いの時は譲らなかったが、次の日からは臭いと言わなくなった。D児の思いにも理解を示しつつ、関わりを通じて変わっていくことを願った。しかし、排泄の問題はどうしたらよかったのだろうか。



5 人の役に立つ喜びを経験する

散歩の時、誰がA児の車椅子を押すか、誰が手をつなぐかでいつももめる。時には泣き出す子どももいる。子ども達にとって、A児の手伝いは特別のここのようだ。役割は3人いて、A児の車椅子を押す役が一人、A児と手をつなぐ役が2人であった。

でこぼこ道になると、F児がA児に「ちょっとがたがたしてしんどいけどがまんしーなあ」と声をかける。E児はA児と手をつなぎ「歩けるようになったらEちゃんが一番に手をつないで歩きたいなー」と言う。

A児と一緒に地域の公園に行くと、バリアの多いことに子どもたちは気づく。子どもたちは「あ! 階段やA君どないしよう」と子どもたちが心配し、車椅子でも行けるコースを探してくれる。どうしても道がないときは、子どもたちは自分たちの出番とばかりに車椅子を持ち上げてくれる。「また階段があったら助けたる。」と頼もしい。A児の役に立つ喜びを感じている。保育者は感謝の気持ちを伝えた。この経験はこれからの子どもたちの生活にも影響を及ぼすことと思う。

6 大きい声出したらあかん

けんかして大きな声をだしたらA児が泣く。「大丈夫やで」「A君がおこられとんとちがうで」となぐさめて、

背中をさする、手をにぎる、笑わせる。誰かがけんかをはじめると「やめときよ。またA君がなくてもええんか？」と止める。A児をめぐるトラブルが多いが（例えば、車椅子を押したい、手をつなぎたい、給食の時隣に座りたい等）、子ども同士で解決するように促がす。A児が困った顔をする事がないように、やがて即けんかにはならなくなった。

7 「今日はAちゃん全然わらわへん。はよ病院いきよ。」

嘔吐し、ベッドで横になっているA児。子ども達は心配そうに額を触って「だいじょうぶ、ぬるいで」「いや、いつもとちがうで。今日は全然わらわへん」等と話している。C児が遊びにいかずA児のそばで手をつなぎ心配そうに見守ってくれた。母親が迎えにくると、子ども達は「よかったな」「病院いきよ」「はよねるんやで」等と温かい言葉をかけて見送っていた。とてもA児のことを心配している姿に子どもたちの優しさを感じ、こんな気持ちが増えてきていることがうれしかった。

8 老人福祉施設でのお年寄りとの「にらめっこ」

月に1回、介護老人施設に訪問しお年寄りと交流をしていた。A児も一緒に行き、お年寄りといろいろなゲームをした。この日は、お年寄りとはペアになって「にらめっこ」をした。保育者はA児はどうしようと思っていたら、当然のように、子どもたちはA児の車いすを自分たちの列に動かし、お年寄りとはペアを作ってくれた。ルールはわかるのか、お年寄りはA児とやってくれるのかと心配していたが、一緒ににらめっこをした。子どもたちは真剣。勝ちたい。ところが、A児は先に笑ってしまった。それをみて、隣にいたE児が「A児君が笑うから負けたやん！」とすごい剣幕でA児に怒った。私はびっくりした。障害があるからええやんではなく、本気で怒っている。私は子どもたちがA児をどのように受け入れているのか気になっていた。何もできない赤ちゃん？障害を持っているかわいそうな友達？いえいえ子どもたちは、A児のできないことは手伝うけれど、決して赤ちゃんのように特別扱いしているのではなく、仲間として受け入れてくれていたことをこの出来事で確信した。



9 クラスの一員としての仲間意識が育つ

A児は5歳児クラスになった。5歳児の子ども達は、去年の子ども達のA児への言葉かけや接し方を覚えており張り切っている。新入児がA児の椅子を触っていると「これは、A君の大事な椅子や」と激しく怒る場面もあった。新5歳児は去年の経験からA児の気持ちをつかむのがうまい。保育者よりも子ども達と一緒にいることが多かった。保育者が必要なのは移動の介助と排泄の時くらいだった。2年目に入り、仲間意識が育ちつつあり、保育の積み重ねを感じた。

7月頃、クラスの子どもの写真を見せ「～ちゃんは？」と順番に聞いていくと、A児はクラスの子どもの名前をすべて指差してとても驚いた。お気に入りの友達もできて一緒にいると表情が違う。また11月には、遠足の前、動物園で何をみたいかと話をしているとA児が、「きりん」とはっきり言った。この頃に言葉も出始めたようだった。

音楽会ではA児を真ん中にして手をつないで『友達賛歌』を歌うのは子ども達のアイデアだった。行動を共にしているだけで保育に参加しているのではなく、A児は確実にクラスの一員となっている。

10 保護者の温かい目

A 児の母親は入所式に保護者の前で挨拶をされた。A 児の障害について説明をされ、送迎時には保護者と会うこともあるので保護者に理解を求められた。この行動に私は感動した。障害のある子どもを育てるということは、様々なご苦労がある中で、他の子どもの保護者にお話しされることはさぞかし勇気がいったことと思う。その時、私はA 児の母親はもちろん他の保護者との信頼関係も築きながら心して保育しなければと思った。障害を持つ子どもを理解し、友達関係を作っていくのは、保護者の応援や協力は不可欠である。

A 児が卒園する時に、保護者にA 児へのメッセージを書いてもらった。どれも心温まるメッセージで、私は感謝の気持ちでいっぱいになった。保護者は、自分の子どもの成長だけでなく、A 児の姿も気にかけてくださっていたこと。子ども達が家に帰ってもA 児の話をしていたこと。そして、A 児との出会いを貴重な体験として受け止めてくださっていたことはどの保護者のメッセージからも感じられた。一部を紹介したいと思う。

★我が子が人に対して思いやりや優しくできるようになったのは、きっとA 君のおかげです。同じクラスになってよかった。ありがとう。

★A 君に出会えたことは、子ども達はもとより、私たち保護者にとっても大変有意義で、貴重な体験でした。通常私たちがA 君に接する時、どうしても遠慮や戸惑いが生じるが、子ども達はその先入観もなく、ごく普通に接していて、本当にあるべき姿を教えられた気がします。子ども達自身では気づかぬうちに、人を思いやる心と優しさを学んだと思います。またどこかで出会える日を楽しみにしています。

★いつも「お母さん今日はな、A 君〇〇できたんやで。すごいやろ」と保育所の帰りにうれしそうに話してくれました。A 君のことを話している時の我が子をみていると、自分のことのようにうれしそうに話していて、A 君のことが好きなんだと伝わってきます。A 君と一緒に過ごせて、人を思いやる心と責任感ができたように思います。

★12月の音楽会で、A 君のクラスの子ども達と英語の歌を歌うことになり、音楽会の前に何回か指導に行きました。A 君はニコニコ笑い、歌のリズムに合わせて両腕を上下に動かしています。A 君の身体の動きが私に教えてくれました。「そうだ！音楽はもっと身体を動かして楽しまなくちゃ」ギターを弾きながら、私は身体を大きく動かすと、子ども達の動きも大きくなり、声も大きくなってきました。当日は練習の時よりも大きな動きで英語の歌を楽しく歌い、A 君も楽しんでいる様子がわかりうれしかったです。

★E 子がA 君と仲良くできるかなと心配しましたが、私の心配をよそに、2 人ともすぐに仲良くなれてうれしかったです。行事の時は、みんなと一緒に頑張っているA 君をいつも見ていました。見るたびに成長していく2 人に感動していました。2 月の生活発表会では、「A 君も真剣にみんなの練習みてるんやでー」とE 子が言っていました。みんなで成功したい！という気持ちはA 君も一緒なんだと思いました。A 君と一緒に写っている写真を家に飾っています。2 人とも心から笑っています。いつまでもこの笑顔を持ち続けて欲しいと心より願っています。たくさんの思い出をありがとう。

★A 君と同じクラスになって、我が子がとっても優しく、人のことを考えるようになりました。毎日家に帰ってくると、「A 君にこんなことをしてあげたよ」と報告してくれ、A 君のお手伝いがうれしくて仕方がないようでした。A 君が笑ったら自分もうれしくなるようです。保育所でA 君に会えるのを楽しみにしているようでした。A 君に出会えたことで大きく成長した我が子を見て、いろんな人との出会いは大切だなと思いました。

IV 考察

保育内容の領域「人間関係」は人との関わりに関する領域である。保育所保育指針の解説によれば、「子どもは保育所の生活において多くの子どもや保育士等と触れ合う中で、自分の感情や意志を表現しながら、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさを味わい、(中略)一緒に活動したりする楽しさを味わう体験を重ねながら関わりを深め、共感や思いやりなどをもつようになる」⁽²⁾とある。平成29年告示の保育所保育指針であらたに加えられた点は、「ねらい」の「工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、」の箇所である。これは、幼児期に育てほしい姿の(3)協同性に対応するもので、友達と工夫したり、協力したりすることが強調された。

人が人として育つのは、人との関わりからであることをこの2年間で学んだ。A児のおかげで、保育体験の幅が広がり、子ども達が様々な感情を表出し、葛藤しながら、たくさんの優しさや思いやりの芽を育てることができた。A児との関わりの中で、「共に育ち合う保育」とはどういうことかを考えさせられた。

A児は自分でできることは少ないし生活は受動的。しかしA児は人と一緒に好きで友達のことをにこにこしながらいつもみている。何かと一緒にできることが子ども同士の関係を作っていくのではない。同じ場面で笑ったり場を共有したりすることがつながりを作る。また、こそばしたり手をつないだりのスキンシップも心が通う。子ども達は「こないおもとんちがうか？」等とA児の気持ちを考えようとし、「〇〇いうた」等と、A児の言葉がでると、共に喜ぶことができる。障害を特別のこととせず当たり前を受け入れ関わっている。子どものA児の世話をするときの生き生き感は人の役に立つ喜びにあふれている。

保育者は、子ども達がお手伝いだけでなく仲間としてA児を受け入れるためには、子どもの疑問に答えA児の思いを代弁したり、A児への対応を認めたり、注意したり、共感したりすることが重要である。それは、保育者が子どもとA児の関わりを見て、瞬時に適切な対応をしないとできないことである。

「共に育ち合う保育」とは、保育者が障害児だけでなく、他の子どもも大切にすること、どの子どもも尊重される保育に作り上げることである。また、子どもの可能性は未知数であり、人との出会いと関わり、気持ちの葛藤、様々な生きた体験により子どもを成長させることだと思う。

<引用文献>

- 1) 無藤隆監修 岩立京子編者代表 「領域 人間関係」P41 萌文書林 (2018)
- 2) 保育所保育指針解説 ミネルヴァ書房 (2018) P210

<参考文献>

- 1) 田宮緑「領域 人間関係」萌文書林 (2018)
- 2) 小田豊・奥野正義編著「保育内容 人間関係」北大路書房 (2013)
- 3) 松井剛太 (2015) 保育者は障害児保育の経験をどのように意味づけているのか
保育学研究 53 (1) 66-77
- 4) 湯浅恭正 「障害児保育は子ども理解の場づくり」かもがわ出版 (2014)

付記

本研究は、日本保育学会第57回大会において発表したものを加筆修正したものである。

Abstract

Children do not acquire the ability to associate with a person through the communal living at the nursery school and the kindergarten with nature. It is required to support and consider by childminder. Children see behaviors of the childminder well, may imitate it. A childminder is a part of human environment. Children learn many things through the response to children, the relationship between childminders, and the correspondence to protector.

This study is a practical record for two years at nursery school where the author worked. It was the first time for the author to accept the child with severe disorder and nurse them. It was the practice while the author made trial and error. The author searched the way of nursing which concerned with each child as irreplaceable existence and combined healthy children and children with severe disorder to bring up together, with or without disabilities. There were many scenes of questions and actions about the view on children and childcare raised by children.

Through this study, it became clear that it is important to nurse children with a view of childcare that grows up with children having a severe disorder, especially focusing on the "human relations" of childcare contents.